

## 特別セッション1

### 農業協同組合の存在意義と未来像 —政府の「農協改革」とJAの「自己改革」をめぐって—

コーディネーター 辻村英之（京都大学）

2014年5月の規制改革会議農業ワーキンググループの「農業改革に関する意見」から端を発する「農協改革」について、「改正農協法」「農林水産業・地域の活力創造プラン」「農業競争力強化支援法」など、改革を促す政府の一連の動きが続いている。これらを受けてJAも、14年11月の「JAグループの自己改革について」以降の一連の改革案「創造的自己改革への挑戦」「『魅力増す農業・農村』の実現に向けたJAグループの取り組みと提案」の下で、「自己改革」を進めている。

本セッションにおいてはまず、「重大な危機感をもって」改革を実行する「農協改革集中推進期間」（～19年5月）の残りが半年となった今、JAの「自己改革」の進捗状況を、政府の「農協改革」との差異を確認しながら把握する。

次に「農協改革」は、三面複合体的性格、総合事業などの日本農協の特質を、破壊する圧力をかけていると捉え、それらの特質が構築されてきた戦前からの日本農協の発展史を理解する。

そのように日本農協は総合事業を特質とするが、農協の基本的機能は販売事業であり、その不振から改革を強く促されている。そこで欧米の農協において一般的な、販売事業を中心とする専門農協の実態を、フランスを事例に把握しながら、その発展を可能にする要因を日本農協が実現できるのかという比較の視点から、販売事業の今後の可能性を検討する。

最後にその総合事業・生活事業について、組合員農家の農家経済経営構造の把握とともに、農業経営を支えるための経済事業にとどまらずに家計（消費）を含む農家全体を支えるための、生活事業を含む総合事業として発展を遂げていることの意義を検討する。

以上の報告を踏まえて総合討論を行うが、農協の存在意義を再確認した上で、特に「政府の改革圧力に屈しないで守るべき役割（総合事業の未来像）」、「改革圧力の下で弱体化せざるを得ない機能（圧力団体機能、行政補助機能など）を今後いかに補うのか」、「誰のための農協と位置付けるか（職能組合か地域組合か）」などに議論の焦点を合わせる。

1. 座長解題 辻村英之（京都大学）
2. 政府の「農協改革」とJAの「自己改革」—それぞれの実態・差異と進捗状況—  
比嘉政浩（全国農協中央会）
3. 日本農協の特質—三面複合体的性格と総合事業を中心に—  
増田佳昭（立命館大学）
4. 販売事業の可能性—フランスの専門農協との比較に基づいて—  
小池恒男（農業開発研修センター）
5. 総合事業・生活事業の存在意義  
—「食と農を基軸として地域に根ざした協同組合」の展望—  
北川太一（福井県立大学）
6. 総合討論 討論  
座長総括

## 特別セッション2

### 若手研究者にとって魅力的な地域農林業研究とは何か？

コーディネーター 中村貴子（京都府立大学）  
地域農林経済学会 組織担当，若手の会

近年，食や農に対する若者の関心の高まりを反映して，食・農関連の学部や学科の新設が相次いでいる（日本農業新聞 2017 年 12 月 1 日付記事「大学注目 食農 学部や学科 各地で新設ラッシュ ユネスコ無形文化遺産登録一和食ブーム後押し」）。また，「地（知）の拠点整備事業」に代表されるように，地方創生の核としての大学への期待も高まっている。地域の多様な食や農のあり方を解明し，地域課題の解決に貢献することは，まさに本学会が目指す方向そのものである。しかし，学会員数の伸び悩み，とりわけ若手会員数の減少に象徴されるとおり，本学会はこれらの関心の受け皿となり得ていないようである。

他方で，業績主義の強化と任期付き雇用の増加に象徴されるように，アカデミック・ポストを目指す大学院生や若手研究者は非常に厳しい環境に置かれている。若手研究者の育成は学会の存続にかかわる重大な課題であり，もはや個別教員の問題ではなく，学会をあげて取り組むべきものとなっている。すでに，本学会では，個別報告優秀賞の設置や支部大会の活用を行ってきた。また，若手研究者自身の自主的な動き（若手の会）もみられる。しかし，個別の支援策のみならず，学会そのものの魅力を問い直すことも必要である。

本セッションの目的は，食や農，コミュニティに対する近年の関心の受け皿となるような地域農林業研究，および若手が育つ学会活動のあり方について議論することである。第 1 報告では，会員名簿データの分析より，印象論で語られがちな若手の実態を把握するとともに，学会員へのアンケート調査結果を通して，学会活動と若手支援に対する会員の意向を明らかにする。第 2 報告では，本学会の設立当初に立ち返って本学会の意義を再検討する。本学会の名称が変更された際に，地域農林経済研究が何を対象とし，どのようなアプローチを用いるかについて活発な議論が行われてきた（地域農林経済学会編『地域農林経済研究の課題と方法』，富民協会，1999 年）。これまでの議論をふりかえり，地域農林業研究の魅力を再検討する。第 3 報告では若手の会をとりあげる。地域農林経済学会若手の会は 2011 年 11 月に設立され，勉強会や研究報告会を開催してきた。若手の会のこれまでの成果をふりかえるとともに，活動のなかで見えてきた課題を報告する。総合討論においては，本学会の魅力と地域農林業研究の意義を検討したうえで，報告で明らかにされた現状と課題をふまえて，学生が参加しやすく，若手研究者が育つ学会活動について議論する。

#### 1. データベースからみる会員の状況

木原奈穂子（神戸大学大学院農学研究科）

#### 2. 地域農林経済研究は何を目指してきたか

河村能夫（京都府立農業大学校）

#### 3. 若手の会のこれまでのとりくみと課題

本田恭子（岡山大学大学院環境生命科学研究科）

#### 4. 総合討論 討論

座長総括